

西洋建築史第6回

欧州史の表舞台 - 戦争の建築

中島 智章

序. 建築家と軍事

第1書(都市の防御)と第10書(都市攻撃・防御のための機械) 「都市を護る建築家」という理想像を示して全書をしめる
ウィトルウィウスはユリウス・カエサル麾下の軍事技師だったといわれている。

聖俗二分法からの展開 「三身分(祈る人、戦う人、働く人)」という考え方 「騎士:miles」と「貴族:nobilis」の一体化
十字軍(1096-1270)、百年戦争(1339-1453)、イタリア戦争(1494-1544)、ハプスブルク家とフランス王家の抗争(1521~)等

1. 垂直式防御

都市を囲う市壁(city wall) 交通の要衝に発展した平野の町 + 防御を優先して山上に築かれた町 * 「城市」
Aurelianus帝の城壁(Roma) 廃墟となったインフラや水道橋の構造体を利用した総延長20kmの市壁、30m毎に塔
Theodosius II 帝の城壁(Constantinopolis) 堀と塔を備えた二重城壁 Constantinos XI帝治下に陥落(1453)
カルカソンヌ、マーストリヒト、アーヘン、ナミュール、バンシュ、トゥルネ、ブリュッセル、メヘレン、ルーヴェン
要塞建築 市壁の一角を占める都市防御のための城塞(citadelle) + 山上など軍事上の要衝に築かれた城塞
主塔: donjon、胸壁: parapet + 矢狭間、城壁(幕壁: courtine, curtain wall) + 塔 + 堀、城門 + 跳ね橋 + 側塔(= châtelet)
10世紀末~: 木造、土盛 切石を積んだ組積造 * 聖堂建設、高度な組積造技術、石材加工技術、十分な石材供給
フランドル伯居城(ヘント)、ブイオン城、ルーヴル城、バステューユ城、ヴァンセンヌ城(パリ)
教皇宮殿(アヴィニオン)、スフォルツァ城(ミラノ)、エステ城(フェッラーラ) * 第1回十字軍(1096-1099)

2. イタリア式築城術

Constantinopolisの陥落(1453)とフランス王Charles VIII, Louis XII, François I^{er}によるイタリア遠征(1494~) 火兵
平面: 半月堡(demi-lune)、稜堡(bastion)、幕壁(courtine, curtain wall)
断面: 斜堤(glacis)、掩体道(chemin couvert)、外岸壁(contrescarpe)、堀(fossé)、内岸壁(escarpe)、胸壁(parapet)
パルマ、イーペル、リール、ナミュール、リエージュ、ルクセンブルク(リュクサンブール)、ベルフォール... 函館五稜郭
軍事計画都市 敵対する勢力間の版図の変化 ex)ピレネー講和条約(1659年11月7日)とシャルルロワ要塞の建設
パルマ・ノーヴァ、フィリップヴィル、マリアンブール、シャルルロワ、ヌフ・ブリザック
「国境線」の出現 Vaubanの「四角い野原: pré carré」戦略と「鉄帯: ceinture de fer」戦略 都市を結んで防衛線を
ex)北東部国境 イーペル、メネン、リール、トゥルネ、ヴァランシエンヌ、モブージュ、フィリップヴィル、ディナン
サントメール、エール、アラス、ドゥエ、カンブレ、ランドルシー、マリアンブール、ロクロワ
* VAUBAN, Sébastien LE PRESTRE, Marquis de (1633-1707) vs COEHOORN, Menno van (1641-1704)
Louis XIV治下のパリ非武装化(1670)... セルウィウスの城壁を撤去したカエサルの偉業の再現を狙う
Napoleon I^{er}の国民皆兵 国境辺の攻囲戦 パリ再武装=l'enceinte Thiers(1841-1929)、34km x 142m、稜堡 x 94
Henri-Alexis BRIALMONT(1821-1903)の環状配置要塞群(リエージュ、ナミュール、アントウェルペン) 火砲の発達

講義の掟3ヶ条(復習)

- 1) 質問など講義に関係のあることを除いて、一切声を発してはならない。
- 2) 講義時間開始より30分を越えてから、入室してはならない(原則)。
- 3) 健康上の理由などやむをえぬ場合を除き、退室は全く認められない。